
喚呼の法

千海

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

喚呼の法

【Nコード】

N5565U

【作者名】

千海

【あらすじ】

エンターキーを押したつもりが、僕は異世界なんてところに召喚されてしまった。エンター（入る）＋キー（鍵）で異世界に行っちゃうなんて、うまいなあと思ったのは皆には内緒だ。まあ。そんな寒いギャグ共有できるような友達も居ないけど。引きこもり歴8年の主人公が異世界の戦争に巻き込まれ・・・平和な国で育った僕（しかも進行形で引きこもってるのに！）が戦えるわけないじゃないか！！なちよつと異色のファンタジー。

ブローグ

「消えればいい」

と、彼女が言った。

聞き慣れた彼女の言葉だった。

僕は初めて彼女の瞳を見つめ、気づいた。

その瞳は僕のことなんて少しも映してないことに。

彼女の視界の一片にさえ、僕は存在していなかった。今までの僕なら、きっとそれに安堵したことだろう。

その一言は僕を覚醒させた。

それはすさまじい威力を宿した言葉だった。

たぶん、目の前で言われたことも関係しているのだろう。でも、そんなことよりも。

きつと、気づいてしまったからだ。

彼女という存在を認識することによって、全てがとけ込み境界が
あやふやになっていた世界から、僕は切り離された。

僕が僕であることを、ようやく認識できたように思えて。
不謹慎ながら、笑ってしまった。

これは、しばらく先の話。

籠城生活　？まだ兵糧攻めにはあっていない・

朝日が遮光カーテンの隙間から漏れる。

お気に入りの音楽に割り込んでくるバイクの重低音が聞こえたから、そろそろ眠る時間だ。いつも思うけどあのバイクの人、近所迷惑だよな。きつと違法改造してるに違いない、なんて思うのも毎度のこと。

僕はディスプレイの電源だけ消して、ヘッドホンを定位置に置いた。パソコンを落すのはフリーズしたときか、よっぽど気分が向いた時だけ。パソコンは立ち上がったままのほうがいい。目覚めてすぐに使えるから。

そして、体を持ち上げてちょっとばかり背骨を伸ばすと、すぐ後ろのベッドへと腰を下ろした。すぐ後ろってどれくらいかというところ歩いて二歩くらい。

この部屋の唯一の通路は、パソコンが乗った机の椅子を引いたらベッドにぶつかるくらい狭い。まあ、起きてる時間はずっとパソコンに向かってるから、狭さを感じるのはやっぱり椅子を引いた時くらいだろうか。椅子のローラーがガッってなって、ヤバイ、生活音を立ててしまった、なんて焦るのも年に数回。よほどテンションが上がった時か、いきなりお腹を下した時か…後は頭が空っぽになつてた時くらいかな。

ふと部屋を見回す。

黄土色の遮光カーテンから漏れる光で、部屋の中に浮かび上がる物。部屋の隅っこに置かれた収納ボックスと、その上にきちっとたたまれた衣類が目に入る。

あ、ホコリの塊がある。

だいたい、遮光カーテンのくせに光が漏れるなんて…やっぱ、安かったからかな。

薄暗いくらいだと余計フロリングのホコリが浮かんでみえてダメだな、なんて思ったところで、僕は頭をゆるゆると横に振る。

だめだ。やめとけ。考えると腹が減る。

そうでなくとも僕は1日1・5食生活だ。カロリー摂取は極限まで控えている。おかげで肋なんてあるだけぜんぶ浮かんで見える。

自分の細い腕を眺めて、女みてえ、なんて揶揄するけど。あれだな。お隣の奥さんの方がよっぽど僕より腕力があるだろうな。小さない子供2人を余裕で抱っこしてるのを見かけた時があるもんな。そうすると僕の腕は女の人より女みてえ…となるわけだけど、うん、考えるだけ無駄なことだ。

大体、腹が減るから考えるのをやめようとしたばかりだというのに。

早く寝ないとお手伝さんが来てしまう。来たからって会う訳じゃないしどうってことないけど。この家に誰か居るって意識するのを、精神衛生上、なるべくなら避けて通りたい。だから寝たフリ。フリっていうよりここまで起きてたら眠くてたまらないだけどさ。

僕はいつ洗ったか覚えていない枕に頭を乗せる。トイレもさつき行つといたから問題ない。ここまで疲れてたら今日も嫌なこと考えずに眠れそうだ。

おやすみなさい。朝だけど。

僕は現在進行形の引きこもりである。引きこもって8年になる。

ほんとは日にちなんて数えたくないし、数えてもいないけど、ミヨコさんが食事のついでに用意してくれるクリスマス・ケーキに刺さって付いて来たレプリカ柵の飾りの数で、自分が引きこもってど

れくらいになるのかわかってしまう。捨てればいいのに、どうしたことが僕は柵の飾りを捨てられずに居る。閉じこもって何年になるのか忘れちゃダメだ、なんて。心のどこかで思ってたりするのかな。こもった原因はもう覚えていない。っていうか、原因たりえる衝撃のイベントなんてものは存在しなかったはずだ。

国語の授業で「行人偏」を習った日からあだ名が「ぎょうにんべん」になった小学生時代を経て、学区内の中学校へ。そして何を間違ったのか高校受験に成功し、進学校で有名な私立高校へと進学した。何でそんなとこ受けたかというと、中学教諭に勧められたつてのと、家から近かったという単純な理由から。振り返ってみても小学生の時に名前をからかわれて嫌な思いをしたくらいで、本格的なイジメらしいイジメを受けた訳でもなく。やっぱり、平々凡々な自分の歴史に墨汁をこぼしたような消えない跡があるわけでもない。

そこそこのレベルの国立大学の入試も現役でパスして、入学式、そして夏休み…というところで、僕は世の中からフェードアウトしていった。大学生ってたしか18歳くらいで1年生だから…今は26歳くらいかな。

両親は共に健在。だけど、僕が大学に入ったあたりからずっと海外赴任してる。たまにメールで連絡がくるくらいで、こもってから一度も会ってない。ミヨコさん、うちのお手伝いさんからきつと連絡が行ってるんだらうけど…これって、放置されてるってことなのかな？会いたくないから今は逆にありがたいけどね。

そう。ミヨコさん。僕のためにお手伝いさんを雇えるくらい、父親は稼ぎがいい。家の中で一番狭い部屋（ぶつちやけ物置）を籠城の舞台にしているんだけど…なんていうか、家でかいし各部屋が広いもんで…物置^{もの置き}くらいしか安心できる場所がなかったんだよね。今現在、僕はそういう環境にある。

だから家政婦みたいなことをしてくれるミヨコさんが一番近い人なんだけど、こもってるから通常コンタクトもなければ会話もなし。一通りの家事をこなして僕の夕ご飯と粗食を用意したら、彼女

は毎日午後3時で自宅へ帰って行く。

家の中から人の気配が消えたのを確認して、僕はやっと城^へを出る。食べて、出して。たまにシャワー浴びるかな。で、パソコンでネット小説や動画を見ながら時間をつぶして、翌朝、例のバイクの音を聞いてから就寝する。

このサイクルをかれこれ4年くらい続けている。バイクの兄ちゃん（想像だけど）は4年前に現れたのだ。重低音が煩いと思いつながら毎日同じ時間に走る律儀な彼には実はちよつとだけ感謝してるし、意外と近所の人たちにも重宝されているんじゃないだろうか。

こもる部屋があつて、家事をしてくれる人が居て、ご飯も出してもらえるし、ネット設備まで充実してたら…大きい声じゃ言えないけど、部屋から出ようなんて益々思わなくなるよね。って、出たくないから出ないだけなんだけどさ。

この籠城生活。世の中から忘れ去られた僕を物理的に攻撃してくるような奇特な人は今のところ居ないから、まだ兵糧攻めにもあつてない。これから先、もしも兵糧攻めにあつたら、僕はきつと飢えて死ぬだろう。食べ物を得るために外に出るなんて考えられないし、それが意図されたものだとしたら尚のこと。あれ？自分の意志で食べなくて餓死するって、自殺になるのかな？

眠りかけたところでハッと目が覚めた。

？眠る前にアレだけダウンロードしておかないと！

僕は体を起こして床を二歩進み、ディスプレイの電源を入れる。マウスを左右に振って寝入ったパソコンを揺すり起こす。

現れたダイアログボックスに半角小文字でパスワードを打ち込んで、エンターを押そうと右手の薬指をのばした。僕は小指じゃなくて、薬指派だ。そんなことはほんとどうでもいいんだけど…よく確認してから押すんだっとな、なんて思っても後の祭りです。

エンターキーを押したつもりが、僕は異世界なんてところに召喚されてしまった。エンター（入る）＋キー（鍵）で異世界に行っちゃうなんて、うまいこというよなあなんて思ったのは皆には内緒だ。まあ。そんな寒いギャグ共有できるような友達も居ないけど。

引きこもりの僕は真剣な視線一つとその他大勢の奇異の視線に曝されながら、立ち尽くすことに全神経を集中させた。

??ああ…足が震える…（涙目）

召喚されて　？エンターキーを押した覚えしかない？

外の世界に出るのなんて、正直、もつとずっと先だと思ってた。
おとぎ話みたいに、現実味をおびた気がしなかった。

今、自分の身の上に外の世界と言っても異世界、目の前に現実味
がありありと感じられる光景が広がっている訳なのだが…

知らない人が居る。

その後ろには、知らない人達が居る。

一人だけ前に出ているのは十代後半ごろの女性。彼女を遠巻きに
するように、数メートル離れたところで帯剣した男達がこちらを伺
っている。

女性は袖の膨らんだドレスを着ているが、色合いも加えてとても
質素な出で立ちだった。頭には飾り一つなく、くせ毛のようなゆる
いウェーブのかかった金髪を、後ろで一括りにしている。束からも
れた金色が、気まぐれに吹く風に揺れていた。

男達のうちの数名は金属の光沢がある兜をかぶり、あるいは、胸
当てや籠手、そして具足のようなものを身につけている。中には皮
や布でできた防具を纏っている者もいて、統一という文字が見当た
らない。それらの様相が、どこか草臥れた雰囲気を漂わせている。

僕はそんな彼らを、まるで上空から見下ろしているような位置に
居た。

??まるで？

無意識に浮かんだ言葉を意識する。

足下に視線を落せば、地上は少しだけ遠い場所にあった。僕の距離感が正しければ上空約15メートルといったところだろうか。マシヨン3階分の高さから見下ろしているような感覚だ。混乱ついでに視界を広げてみれば、何か大きな影が大地に落ちている。慌てて空を見上げるも、薄い雲が遠くに見えるくらいでその影を作るような遮蔽物など見当たらない。

キーボードの上にあったはずの両手の指の間を風が撫でていき、僕はそっと両腕を体の脇に降ろした。

異世界召喚。

脳裏にその言葉が思い浮かぶ。

時間潰しに読んでいるネット小説でよく目にする言葉だ。

ファンタジー小説の異世界召喚といえば、神殿の魔法陣の中や祭壇の前に現れたりするところだろうが、これといってそういったものも見当たらない。

夢オチを期待するも、あいにく僕はこんなに臨場感溢れる夢など見たことがない。期待するだけ無駄なような気がしてくるというのものだ。

一見して目の前の彼らがすぐにこちらを害せるような状況にないことから、思考は落ち着いているように思われるが、体は正直である。

実に8年ぶりに目の当たりにする群衆。そして彼らの視線の熱さに、僕の体は震え始めていた。

たくさんの人を前にして掻き乱される心。どうしようもない嫌悪感と恐怖感。この震える心と足のことなど彼らには到底、理解でき

ないだろう。

やっと思い出したように、堰を切った後から後から溢れてくる思考の濁流に、意識が流され、かき消されてしまいそうになる。

僕は潤み始めた目を彼らに悟られないように、拭おうとする欲求を必死に押さえ込んだ。

誰一人、物音一つ立てない不自然さに精神が限界に達しようとしたときだった。

「メル・シャンテ殿」

女性の後ろに控えていた男達の中で一番年高く見える武人が、低い声で何かを促した。それを切掛けに、彼らの視線が一気に彼女へと注がれる。

彼女はそんな男達のどこか期待のこもった視線をもろともせず、ただ静かに僕を見つめていた。

そして、ようやく口を開いた。

「カラシナ様。わたくしは貴方様の血脈と盟約を結ぶ、メル・シャンテの血族の長。ルル・メル・シャンテと申します」

そう言って丁寧に膝を折り、頭を下げる。

数秒経過して顔を上げた彼女の真つすぐな視線を受けとめきれなくて、僕はそつと視線をそらした。

声と態度でわかるんだ。

彼女からは真面目に生きてきた人だっということがひしひしと感じられるオーラが出ていて、僕の目には眩しすぎた。8年も引きこもっているような後ろ暗い歴史を持つ僕に、直視なんてできるわけがない。

「此の度は急な召喚に応えて下さり感謝いたします。此処は貴方様

の世界と界を逸する異界でございます。わたくしの願いはこの命の尽きるまで、貴方様をこちらに召喚し、助力を得ること。世界の制約に従い、対価として貴方様の望むものを差し出すことをここに誓約いたします。了承の証としてカラシナ様のお名前を頂きたいのですが…」

ガクガクいつて収まらない足を激励しながらやつの想いで立っている。そこへかけられた言葉はほとんど理解できなくて。最後のほうの「お名前を」という音に頭は反応するものの、声がかかかたで思うように答えることができなかった。

場に再び沈黙が訪れる。

「メル・シャンテ殿！」

わずか数分を我慢できない男達がざわめき始める。

「貴女の召喚の儀のためだけに前線に立つべき精鋭達を引き抜いてここまできたんだ！ここで“カラシナ”を手に入れられなかったら我々は一体何のために！！」

怒り、早口でまくしたてるようにその男は叫んだ。

続けとばかりに、次々と他の男達が口を開く。

「だから私は反対だったのだ！メル・シャンテ…堕ちた王族の小姑娘などを頼るなんてな！」

「しかしこうして召喚には成功しているじゃないか！」

「だが本当に成功したのか？これは本当に“カラシナ”なのか？聖戦で私が見た時は“漆黑”だったのだぞ！これは“褐色”じゃないか！」

褐色。

耳がその音を捕えた。

そうだ。

僕の髪は生まれた時から茶色なのだ。それも艶のある。だから茶色というより銅色あかがねいろに近いかもしれない。それは生まれつき黒髪の人種が殆どを占める小さな島国において、異質だった。自分を取り巻く環境に違和感を覚えた時、茶色に染めていたものを黒に戻したというポーズのために、この髪を黒く染めることを始めた。それは大学生になるまで。僕が世の中からフェードアウトするまで続いていた。こもってからは長さが鬱陶しくなると自分で切るようになり、髪型は何年か前から茶髪のざんばらで落ち着いている。

他にも気になる単語がちらほらと耳にかかったが、突っ込む気にはなれなかった。

そうしてしばらく、ぼんやり過去に意識を飛ばしていると、急にざわめきの空気が変わる。後方の何人かはしきりに自分たちの背後を気にして振り返っているようだ。

「隊長！！！！たった今、ルンガから召喚士オリヴィアが戦線離脱し、こちらの方へ向かったとの報告が……！」

？？戦線離脱？まさかこの世界、戦争でもしてるのか？

小さな紙を掲げて、初めに声を上げた年長の男へと部下らしき人物が歩み寄る姿が見えた。

「おい待て！地平線に何か見えるぞ……！」

緊迫した空気を肌感じて、急激に意識が戻される。

「……………っ！」

「うわあつつつ!!!」

「オオカミ！オオカミだあつ！」

「あ…あれは“炎狼”と“水狼”…“サキミヤ”かつ！」

叫ぶ彼らの視線を追えば、地平線に点のような何かが見えた。それは段々大きな点になり、揺れ動く影になり、サキミヤ、と誰かが呼んだ頃には巨大な四足の獣の姿がしつかりと見て取れた。

二匹のオオカミ——もちろんそれは僕の足下に遠く及ばない大きさではあるが、人間2、3人分：4、5メートルはありそうだ——はこちらの姿を捉えると徐々に減速し、彼女と男達を間に挟むようにして僕と対峙する。

パニックを起こす男達には目もくれず、彼らはどうもこちらを伺っているようだった。

??普通のオオカミがこんなに大きいわけないよね。それに一体どれほどのスピードで走ってきたんだ？地平線からここまでつて…いくらなんでも速すぎだろ…？

他の誰かが恐慌状態に陥ると、対して冷静になれる人間が存在する。僕はどうやらそのタイプのようだった。…というよりは、余裕がなさ過ぎて離れていたところを置いていかれた、と表現するほうが適切かもしれないが。

ただ、呆気にとられてことの成り行きに身を任せていると、驚くべきことが起きた。赤色のオオカミが遠吠えをしたかと思えば、あごを下げて首を左から右へと一閃。その口からゴウツ！と炎が吹き出して、あっという間に地上の彼らを炎の柵で囲んでしまったのだ。輪をかけて動揺する男達。

そこに冷えた声が聞こえた。

『…オリヴィア、離して』

青色のオオカミが背中に乗せた少女を疎ましそうに見上げている。少女は焦げ茶の髪をなびかせながら、しぶしぶといった感じで彼の背中からずるずると這い落ちた。そして地上の男達へ向かって言った。

「わたし、オリヴィア・ヴォーンズ！ “サキミヤ” の召喚士よ。 “霸王” の召喚を阻止しに来ただけど…」

くすり、と邪気なく笑い。

「契約はできてないようね？」

その言葉に男達はグツと押し黙る。

他に解釈のしようがない、明らかな肯定だ。

不意に、赤と青の毛並みの二匹のオオカミがこちらを見上げて言った。

『オレ、崎宮^{さきみや・あると}在人^{ゆいつと}。こっちは有人^{ゆいつと}。高一だぜ。初めましてだな』

僕がその名を認識すると、彼らの姿は人のそれに変容していく。黒髪に茶色の目。典型的な日本人のそれだった。

いきなり話をふられたことよりも。

口から火を吹くオオカミが人の姿になったことに驚いている僕に向かつて、在人はごく軽い調子で問いかける。

「で、あんたは？」

???僕は、エンターキーを押した覚えしかないんだけどな……………

なんだろう、この状況…

召喚されて　？エンターキーを押した覚えしかない？（後書き）

この小説はフィクションです。

主人公が住んでいる場所は地球の日本という設定ですが、似たような異界だと思って下さい。登場人物の姓名に常用漢字以外の漢字が使われる可能性があります。

守勢の僕　？平和の国の生まれなんだ、戦えるわけがない？

永らく他人と会話することがなかったから、僕は言葉を発することを忘れてしまったみたいで………声が、出てこないんだ。

『オレ、崎宮^{さきみや・あると}在人^{ゆうじん}。こっちは有人^{ゆうじん}。高一だぜ。はじめましてだな
僕がその名を認識すると、彼らの姿は人のそれに変容していく。
なるほど。

なぜ苗字が一つしか紹介されなかったのか。これは説明されるまでもない。

彼らは紛れもない兄弟——1卵^{ふたご}性双生児——だったのだ。

「で、あんたは？」

驚くことだらけで終始無言の僕に対して軽い調子で鋭い問いがかけられる。

だいたい、ほんの少し前にエンターキーを押した覚えしかないというのに、どうして中学を卒業したばかりのような未成年に詰問されるような事態に陥っているのだろう。

段々自分が情けなくなっていく。

「にしてもすげーなあ、あんた。こういうのを見ると、さすが異世界だよな」

答えないこちらをまるで気にすることなく在人が呟いた。

「ドラゴン相手に狼の俺達、勝てると思う？」

兄弟の声に隣の有人はフルフルと首を横に振る。どうやら彼の方は寡黙な部類に入るようだ。興味津々な在人をよそにどこか気怠げな有人。冷静と情熱の…と、ある本のタイトルの冒頭が浮かんだところで、なるほど、赤と青の組み合わせはそういうことなのだろうかと推測する。

??それにしてもどうして狼が人間に? いや。元々人間だったのが異世界効果で狼に変身できたのか?

黒髪茶目の見た目に高一という言葉から明らかに日本人な彼らの登場で、いくぶん僕にも余裕ができた。はじめていた。

足はまだちよつと震え気味だが、同郷を前にして、異世界召喚という超常現象と群衆に対する恐怖感はそこそ薄れてきたようだ。

??あと、どうやって火なんか吹いたんだ??

あれか? ファンタジーの鉄則ってやつなのか? と、妙な方向に話を落してしまいそうになる僕を引き戻すかのように、オリヴィアと名乗った少女が声を張り上げる。

「あー! つもう! ユウトはいつもやる気なさすぎ! 見た目と力は必ずしも一致しないって何度説明したらわかるのよ! 契約してない召喚獣なんて怖くないの!」

それに、と子供のくせにニヤリとした笑みを浮かべて。

「“カラシナ”は好戦的で冷酷な生き物よ。気に入らなかつたら味

方の城だつて破壊するんだから。現にこうして召喚士が気に入らないから返事も返してないんじゃない」

「??いやいやいやいや!ちょっと待って!それって一体どんな設定ですか!」

“カラシナ”の僕は絶句する。

好戦的で冷酷?引きこもりの僕が??って話だ。

それに、返事を返してないのは気に入る・入らないの問題ではなくて…声さえまともに出せないほどヘタレなだけなのに。

??反論すらできないなんて。ほんと、情けない…

自分自身がいたたまれなくて、体がどんどんしぼんでいくようだった。下に居る群衆にばかりフィルタをかけて、たった一人、僕を呼んだ張本人を力なく見下ろした。

??この世界…いや、国か?とにかく此処では今、戦争が行われているらしいね。召喚士と召喚獣、それに、契約?…ねえ、どうして僕なんか召喚しちゃったの?君が命をかけるほどの価値が、僕にあると思う?

「メル・シャンテ殿!」

また、男が叫んだ。

焦りのような、責めるような、どこか期待するような。いろんな色の混じった声だった。

対して。

力ない僕を澄んだ瞳で見上げて、彼女は安堵したような、まるで悟りを切り開いたかのような穏やかな笑みを浮かべていた。

その口が開く。

「問題ありません。叔母さまの時は承諾を得るのに一日を要したと聞いています。カラシナ様は知に優れたお方。どうぞ存分にご考慮ください。わたくしが貴方様を召喚する者として相応しいか、お確かめください」

衝撃だった。

そりゃ、もう全部が。

なにより声がきれいで…。

本当に、きれいな人だと思ったんだ。

見た目が、っていう訳じゃない。

なんていうか…内面とか心とか…それとも少し違うように思うけど、そういうものがとても澄んでいるような気がした。

崇高…うん、それに近いかな。

とにかく彼女という存在はその時、僕にとって最高に崇高だった。

僕たちはまた無言のまま見つめ合う。自分とは何もかもがかけ離れた彼女から早く目を逸らしてしまいたいのに、彼女の瞳がそれを許さない。

その金色の髪が炎の風に煽られて、揺れた。

「時間はたっぷりあるみたいない方だけど、わたしたちのこと忘れてない？アルト！」

「なんだ？」

「何だ、じゃない！攻撃よ攻撃！カラシナがあの子と契約する前にあの子を殺すのよ！」

「…え…？殺す？殺すって…この子を？」

赤い色が視界の端に揺らめいて、僕の世界が再び鮮やかな色を取り戻す。

少しだけ周りの状況を把握した後、すぐに自分の殻に閉じこもってしまいたくなる僕と、そんな僕を邪魔するこの異世界との戦い。それを繰り返しながら、少しずつではあるが着実に僕の意識は内側から外側へ引きずり出されていく。

余裕の笑みを浮かべて少女が放つ言葉に、在人はどこかうんざりしたような顔をした。

「聞いた？ 有人。子供が殺すとかって世知辛い世界だよなあ、ここ」

日本じゃ考えられねえ、と彼は続けて盛大なため息を吐いた。

僕からしたら崎宮兄弟だってまだ子供のうちだけど、自分は大人だ！なんて胸をはっていえる立場にないことくらい重々承知している。

ここで幸いなのは、在人が“まとも”な思考の持ち主であることだろうか。

「しょうがないか。現実だけどゲームみたいな世界だもんな、ここ」

途端、在人が胸の位置まで上げた両手の間に赤い炎の渦が現れた。

「？？え、それ、どんなマジック…？あ、いや、“魔法”か？

僕が目が点になる。

「有人の出番なんかないぜ とりあえず、炎の竜巻みたいなやつ！」

燃え盛る炎を右手に持ちなおして、ドッチボールを投げるように

それを群衆の頭上へ放り投げる。

「カラシナさん、だっけ？呼ばれて早々悪いな！異世界楽しみたかったかもしれないけど、あの人死んだらあんだ日本へ帰れるからさ。変な夢でも見たと思って忘れたらいいよ」

そう言って在人は器用に指をこすり合わせる。

それが視界いっぱいになり、一秒の駒送りのように映った。

??待つ…！

上空に放り上げられた小さな炎が爆発する。四方に飛び散った炎の筋が生き物のようにうねって中央に寄り集まり、炎柱を形作る。渦巻いたそれは地上の彼らを飲み込むように自由落下していった。

??そんな威力の火に飲まれたら、人なんか簡単に死んじゃうだろ！？

僕の心の叫びと同時に、竜巻みたいな炎は地上の彼らの一切を飲み込んだ。

息を飲んで見つめるだけの僕と、楽しそうに笑う小さな女の子。目前で燃え盛る炎はまるで、この異世界の狂った人々の有り様を示しているようだった。

余りにもあっけなく命が摘まれるその様は、僕の心を深く落していく。

??どうしてこんなことを…

ただ。

ほんの少し。もう少しだけ。

彼女の声を聞いていたかったと…思う。

それは小さな、本当に小さな僕の望み。

人と関わることを諦め、放棄した僕が久しぶりに抱いた他者への興味。

??あんなにきれいな子が、こんな簡単に死ぬなんて…おかしいんじゃないの?どう考えたって、僕なんかよりずっとこの世界に必要な子でしょ?

目のあたりに水みたいなものが浮かんで来る。

??僕が召喚獣で、彼みたいなファンタジーな能力が貰えてるんだとしたら…ねえ、神様。こんなクズみたいな僕の命なんかいらないからさ。あの子のこと、助けてよ…?

けれど世界は沈黙したまま。

無力な自分がほんとうに嫌になって、僕は顔を背ける。

見えてなかった大地が…どこまでも続く荒涼とした大地が、遠くから物寂しい風を運んで来る。一本の樹木すら見当たらない乾いた土色の景色に、戦争がもたらす不毛な結末が思い描かれた。

ネット小説の救世主のように、こんな世界を引きこもりの僕がどうにかできるなんて端から思ってたなどいない。

だけど。

??僕は無力だけど…ここに呼ばれるような力が何かあったんだとしたら…

『…君を助けたかった』

呟いた小さな声は誰の耳に入ることなく虚空へ消えた。

「よしつ。任務完了！さ、帰ろっ？」

子供の澆刺とした声が耳に届く。

視線を足下の炎へ戻すと、ゴウツ！と風が吹き抜けた。

目から水が零れたかどうかというところで、不意に上向きの力が地上の炎を押し上げる。

??
.....?

「.....生きて、る？」

誰かが声を発した。

目を凝らすと、僕を呼び出した彼女と彼女を取り巻いていた男達の姿が、かき消されて行く赤の間から少しずつ現れる。

??あ...

「な...なんで？契約、してないんじゃないの？」

狼狽えた様子でその少女、オリヴィアが呟き、それを聞いた僕はもつと狼狽えた。彼女達を守ったのが自分だなんてとても信じられないけれど、他に彼らを守ろうとした存在はここには居ない。

??僕何かしたの!?

「すげーぜ、カラシナさん。未契約でオレの力をかき消すなんて！今の見たかよ、有人」

「バ...バカっ！アルトのバカっ！だから“カラシナ”は特別だって

言ったのに！早くやつつけてよ！」

「…んなの聞いてねーし。ったく、むちゃくちゃなお子様だなあ…ま、でも同族相手にすんの久しぶりだしな！よし、やるか！」

??！?

混乱も束の間に、頬を火の塊がかすめていった。

「よそ見していると当たるぜ？」

??な…なんっ…

声の主を見れば、不敵な笑みを浮かべている。

彼の周りには野球ボールほどの大きさの炎の塊がいくつか浮かんでいて、飛んで来たのはそのうちの一つのようだった。

??いつの間に!?!これって無詠唱とかいうやつなのか?でもさっきは「竜巻」とか言ってたかったか…?

そもそもこの異世界における魔法のようなものと、それを発動せしめる呪文とはどんなものなのだろう。そして僕が使った(らしい)魔法とは何だったのだろうか。

脳みそが即座にクエスチョンマークでいっぱいになったが、在人はそれが解消されるのを待ってはくれない。

「的が大きいとそうそう外れないから助かるぜ、野球部で鍛えたオレの豪速球受けてみる！」

「…ベンチのくせに(ぼそっ)」

「……黙ってる文化部」

いきなり突っ込む有人に苦い顔をしながらも、視線を外さない在人。戦いというものに慣れていてような彼らの雰囲気、嫌な汗が噴き出してくる。

「とにかく、やるぞ！」

意気込んだ言葉の次には迫り来る炎の球。

???うつ！

思わず僕は右手で顔を隠すようにして、それを受け止めようとした。怖くて目を閉じていると、風船を投げつけられたような感覚が腕に届く。

??熱…く、ない…？

それに、痛くもない。

おそろおそろ目を開いて状況を確認する。

何か柔らかいものが当たった気がする右腕をひねって見ても、火傷の痕どころか何の痕跡も見当たらない。

??????

「くつそ…鱗のせいでノーダメージかよ。ずりいよ、それ」

「…まあ、ゲームだとドラゴン形態の召喚獣って最後の方で手に入られるやつだもんね。それなりのMP削って召喚するし、強いのが当たり前じゃない？たぶん親戚なんだろうけど、前に召喚された力ラシナさんが“覇王”って言われてるくらいだし。メル・シャンテさんが生きてるって話になった時、あの人、すぐに殺せて命令したくらいだから」

「体中鱗なんだぞ。どこ攻撃すりゃいいんだよ？」

「目とか口…って言いたいところだけど、在人はコントロール悪いもんね。そうだなあ。誰から魔力を貰ったのかわからないけど、一番確実そうなのはやっぱり召喚士を攻撃することかな。これまで無言であの力だしさ。アドバンテージがかなりあるんだと思うよ」

「??有人君、話し始めると長いんだね…そして僕より冷静で頭が良いようで…なんか戦争の情報にも通じてそうだし…異世界召喚された親戚って…いや、その前に攻撃されそうなあの子、守らなきゃいけないよね？でもどうやって？」

僕は崎宮兄弟が話し込んでいる隙に無い頭を必死に動かそうとするけれど、どうすればいいのか余計にわからなくなる。

「??そもそもさっきのは何だったんだ？」

「在人、召喚士を狙って。オリヴィアが居るから、残りの男達も忘れないでね」

「ユウトってば…いざとなったら優しいんだから」

「お前は？」

「援護する」

「…うしっ。わかったぜ」

最後にアイコンタクトで何か会話があったようだが、当然、他人の僕にはわからない。オリヴィアという名の少女はそんな彼らの側でニヤけながらどこかにトリップしているようだが、二人の意識の中には既に存在しないものようだった。

「行けっ」

??うわっ、ちょっと、まだだめ！それ、だめだつてば！

予備動作に入った彼に、心の中で思いきり待ったをかける。…当然、待つてなんか貰えないんだけど。

かざした手のひらから炎が勢いよく吹き出したのを見て固まっていると、目の前に何か鋭利なものが迫っていた。

反射で顔を逸らせる。

??あぶなっ…何だ今の！？

「…動体視力までいいのか」

見下ろせば少年の冷たい目が光る。

「うわあああっ！！！」

叫び声にハッとしてそちらの方を向けば、在人が出した炎が逃げ惑う幾人かの男達を飲み込んでいるのが見えた。せめて彼女だけでも守らなければと意識を切り替えるも、視界の端に再び現れたそれに集中力が削がれる。寸でのところで躲すが、次から次へと僕の目を狙っているであろう攻撃が続く。

??考えろ！どうやってたらさつきみたいなのができる！？

目を守るように腕をかざして強く想う。

??有人君はどうやって僕に攻撃してるんだ！？思い出せ！

在人も有人も、難しい呪文めいた言葉を話していた記憶はない。初め、在人が「竜巻」と言ったらそれらしい魔法が発動した。次に

彼は無詠唱で火の玉を複数出すのをやってみせた。僕は呆気にとられてそれらを見ているだけだったが、最初の攻撃の時に彼女を「助きたい」と思った気がする。そうしたら何かよくわからないけれど、彼女達は無事だった。次の火の玉は僕の鱗（↑なんだそれ？）に当たって消えた（らしい）。

??呪文とかは必要ない？ “何か” 言うだけ？あとは“思う”？……あ。もしかして。よくある話だけど、思えばいいだけ？

氷塊が飛んで来るのを気配で悟った僕は、その前に腕をかざして「来るな！」と思う。

すると、氷塊は僕の体にぶつかる前に何かに弾かれ飛散した。

??……上手くいったけど、そんな単純な……

念のためにかざした腕が不必要になって、なんだか手持ち無沙汰になる。……いや、そんなことなかった。有人がその隙さえ逃さず攻撃を仕掛けてきたのだ。

??有人君、容赦ないね……（涙目）

ほんの少しだけど勝手が分かった僕は気を取り直し、散り散りになつてしまった地上の彼らを見下ろした。彼に邪魔されないように「攻撃あたるな！」と思いながら、僕を召喚した彼女を探す。彼女は両隣を固められ、男達に引きずられるようにして逃げていた。

??見つけた！ええと……あの人達を守りたい！

そう思うと同時に、吹き付けていた炎が何かに遮られるように彼らの周りだけ途切れた。

その光景に疑問符が浮かんだであろう男達はそのまゝ怪訝な様子であたりを見回していたが、彼女はすぐにこちらを見上げ、驚いたような顔をした。

「メル・シャンテ殿のところへ走れ！そこなら炎から守られる！」

逃げ延びた幾人かの男達が我も我もと彼女の元へ走り出す。

？？：よかった…間に合った…

「有人！なんかバリアみたいなもの張られたぞ！」

「…うん。こつちも当たらない」

「どうする？」

いつまた攻撃されるかと内心ビクビクしている僕は、ずっと「攻撃当たるな、彼女達を守る」を心の中で繰り返していた。他にどうしたらいいかわからないから、ひたすら守りを固めることしかできない。

「こうなるとどちらの魔力が先に枯渇するかの勝負になるのかな」

「オレ、あと少ししかない」

「…相変わらずペース配分下手だね」

「常に全力の方がカツコイイだろ」

得意げに話す在人をどこか疲れた目で見つめる有人。

いつもの僕なら、たとえ双子に生まれても全部が全部同じになんかならないよね、くらいの感想を持つところだが、そう思えるほど心理的な余裕はなかった。

お互いに沈黙し対峙する僕らの間を、やや冷たい風が流れていった。僕は彼女から視線を外して、崎宮兄弟の出方を伺う。

どちらも動かず、相手を見つめていた。

幾許かして、オリヴィアが僕の方を指差して小さく声を漏らす。

『よう。崎宮ブラザーズ、何もたまたやってんだあ？』

背中を冷たいものが流れた。

その声と言い方からして、とても苦手な部類の人だと即断する。

声はすぐ後ろから聞こえた。崎宮兄弟にばかり注意が行って、彼らの援軍に易々と背後を取られたようだと悟る。

ところでこの異世界、召喚獣同士の殴り合いってアリなんだろうか。

そう思ったらなんとなく意識が遠のいていくような気がした。

??肉弾戦に持ち込まれたら死ぬな…

自己防衛なら得意　？安心できる場所は自分の殻の中だけ？

どうかお願い。僕の聖域に入って来ないで。僕を放っておいてよ。

ヘッドホンをして音楽を聞きながらその時気になったことを検索。後は小説を読んだり動画を見たり。

ニュースも見るから一応世の中がどう動いているかは何となくわかる。

掲示板でたまに、あ、仲間な人？って思う書き込みを目にするけど…考え方が微妙に違うから滅多に共感はできない。

批判なんてしない。肯定もしない。

自分から反応を返すことなんてするわけがない。

僕はずっと受動のまま。ここしばらく、自発的な行動なんて起こしてないと思う。

…だから、異世界効果ってすごいな、なんて思ったり。

戦争と聞いて何が思い浮かぶかと問われれば、残酷、の一言。

在人君が放った炎は幾人かの男達を飲み込んで、そのまま灰にしまった。これも“異世界効果”って言うのか、僕の視力はものすごいことになっている。見ようと思えばかなり遠くまで、あるいは微細な場所まで見えるということに気づいたのは、メル・シャンテさんの瞳の色が緑色だったから。

普通マンション3階ぶんの高さから地上の人を見下ろしたら、瞳の色まではわからないでしょ？…なんか、ごめん。僕の場合は見えないんだよ。

まあ、そういう訳で彼が人を灰にまでしてくれたおかげでグロイ

光景を見ずに済んでちよつとほつとしている。焼死体を細部までつていうのは繊細な自分には充分拷問だ。もちろん小心者で感化されやすい僕は、人があつけなく死ぬ…もとい、自分と同じ世界の同じ国の人が簡単に他者を殺すっていう場面を目にしまったことにも、少なからずショックを受けている。

一方で「ああ、なんて残酷なんだろう」とどこかヒトゴトのように思っているのもまた事実だ。

だってここは異世界だから。

異世界、だから。

それに今更だけど“召喚獣”って呼ばれるのは変な感じ。僕は“人”なのに。人のハズだけど…崎宮兄弟は最初才オカミの姿だったし…そうすると、僕たちはやっぱり召喚された“獣”なんだろうか。

「丈也さん…」

気のせいかな、在人がほんの少し引きつった笑顔を浮かべていた。有人のほうに至っては見て見ぬ振りだ。静かだが確かに発せられていた殺気のようなものも、今はなりを潜めている。

対して僕の方は嫌な予感をひしひしと…ちよつと違うな。…びしびしと…いや、ばしばしの方が上か？……………とにかく痛いくらいに、不吉な感覚に汗を滲ませていた。

できることなら振り返ってその恐怖の原因を確かめたい。

でも怖い。

でも。

『コレが“霸王”か？』

丈也と呼ばれた男が誰かに問いかける。

「そうだな。聖戦の時に現れたものとは別個体のようだが、この姿は確かに霸王・カラシナだ。召喚獣は武を以て力を知らしめるものではないから、正しくは“魔”王。いや、王の中の王、“魔皇”と言うべきか」

それは無機質な男の声だった。

とても冷たい…凍えるような、感情の欠落した音。

そこに確かに存在するはずなのに、亡霊の声を聞いたような気さえしてしまふ。

『へえ…俺、若い時、頭やってたんだよね。霸王なんて聞くと殺りあいたくなるなあ』

??なんて不吉なことを…

異世界^{ニッ}で“霸王”なんて二つ名貰った親戚^{ニッ}って誰だよ!?!と心の中で叫ぶ。半分罵倒に近いかもしれない。

小さい頃、父親に連れられて家の方に一度だけ行ったことがあるのだ。大人達の話が終わるまで子供同士で遊んでいればいいと言われる、本筋の従兄妹達と顔を合わせる機会があった。その出会いを一言で言うのなら「最悪」。多くの才能に恵まれ自信と自尊心に満ち溢れた彼らは、普通枠に収まる僕にとって理解不能な存在だった。

“これまでに貰った賞状の数”についての話を聞かされつつ、廊下の端から端まで並べられたそれらの見学ツアーに連れられた時は、もうほんとにどうすればいいのかわからなかった。ねえこれって遊びなの?と問いかけることもできずに、へえすごいね、なんて決まりきった言葉をかけながらやり過ごした記憶がある。

他には「君は何枚?」「1枚だよ」「何で貰ったの?」「運動会だよ」「一等賞のだよ、僕も持ってる」「…いや、五位のだけど」

「え、そうなの？それしか持っていないのかい？」なんて会話があったな。子供心にちよつとヤな奴だなと思ったよ。人の価値が賞状の数で決まるみたいな目をしててさ。

兄も兄だが、妹も妹だった…って、もうやめとこう。

顔も頭も運動神経も良いのに性格に難ありな従兄妹たちを思い出して、霸王か、まあアリだな、と僕は心の中でため息を吐きながら思う。

聖戦っていうやつがいつあったのかは分からないが、それがだいぶ前で彼らの親世代だと言われても“霸王”はアリだ。本筋の人達じゃなくても親戚一同揃ってアリな雰囲気だから、余計、誰だよ！？って話だ。

…わかってるんだ。

こんな平凡な僕だから、普通に嫉妬くらいする。

彼らにその気がなくなつて、比べられてダメな方だと思われたらそれだけで嫌な気持ちになる。

あの人達にはそれが分からなかったんだ。

不吉ついでに現実逃避で、僕はイジイジし始める。

半ばヤケで、自分の殻に閉じこもるように地上の彼らを巻き込んで、重厚でどんな力も通さない丸い防護壁みたいなものを想い描く。そして、目を閉じて一切の意識を内側に向ける。

？？どうとでもなれだ。もう何も見ない。声も聞くもんか。

『戦っていいか？』

遠くの方で何か聞こえた。

でも、何を言っているのかよくわからなかった。

「好きにしる」

『うっし。んじゃまあ試しに…グングニル!』

誰かが叫んだ後に、ぽてつ、とチヨークが頭に落ちてきたような、ごく軽微な感覚があった。僕は痛くもかゆくもなかったから、それを無視した。

『すっげえ！オーデインの槍先が跳ねたぞ！見たかよ今の!?!』

「…そっすね」

『おいおい在人、反応わりいな?しょーがねえ。たぶん槍だから弱かったんだよ。槍って金属の刺さる部分が小さいもんな。見てろ。次はミヨルニルだ!』

少しざわめきがあった後、発泡スチロールのトレイが頭に落ちてきたような感覚があった。お惣菜とかがのつて、面が広い感じのアレ。効果音にすると「パサッ」。

僕はちよつと鬱陶しい気分になったけど、なかったことにして忘れることにした。世の中、気にしたら負けだから。

『マジか！棒が取れたぞ!?!』

「…………柄ね」

「丈也さん、今日は北欧神話攻めなんすか?」

『おうよ、カッケーだろ?インターネットで調べてきたんだ。カミサマの武器だと強そうなイメージだしな。攻撃の種類は多い方が良いと思ったんだ』

「なるほど」

『しかし、慣れないことはするもんじゃねえな！全然ダメージないもんな、霸王』

「オレらの攻撃も当たりませんでしたから。相当守りが堅いっすよ

“カラシナ”さんは”

『守りが堅いつつても無尽蔵なワケじゃねえだろ。俺だって“クチノキ”と張れるくらいの力持ってた。いつも通りのヤツで潰してやんよ』

誰かがまた何かブツブツ話してるな、と意識の遠いところで思っ

??でも僕には関係ない。

見たくないものは見ない。

聞きたくないものは聞かない。

自分さえ守ればいい。

ただ、今だけは、あの子のことも守れれば。

僕は“召喚獣”だから。

戦い方なんてわからないけど。

とりあえず痛いのは困る。

仕組みはよくわからないけど、魔法っぽいものは使えた。

召喚獣は武を以て力を知らしめるものではないと、おそらく丈也という人の召喚士が言っていた。たぶん、殴り合いはナシなんだ。

つまり召喚獣は魔法が全てなんだと思う。

魔法を使えば人を殺すことだってできる。その気になれば、きっと、僕にもできるのだろう。

じゃあ、召喚獣同士が戦ったら負けた方は死ぬのだろうか？

だとしたら、それは困る。

??……………困るって？僕がそう思うんだ??

ぼんやりしていると、ほんの少し、フワッとした何かを感じた。

『アメノサカホコ・コンゴウホウシヨ』

死ぬのは困ると思った自分が信じられずに、閉じていた瞳を開ける。

両手を持ち上げて、握ったり、開いたり。

生きてるってこういうことだね？と確かめるように、その動きを目で追う。

『サジフツノカミ・ミカフツノカミ・フツノミタマ』

地上を見下ろせば、相変わらずざわめいている男達の姿。

その側には僕だけを見つめるメル・シャンテさんが佇んでいる。

『アメノハバキリ・フツシミタマ・オロチノアラマサ』

??君は、生きてるんだよね？

心の中で僕は彼女に問いかける。

彼女の瞳が揺らめいて。

ええ、貴方も。

と、幻聴が聞こえた気がしたから。

『アメノムラクモ・クサナギノツルギ!』

フツと意識が上空に向いた。

何かの気配を感じて。

僕が願った守りの球が、光の波紋を映していた。それはたゆたう力の軌跡。

その揺らぎの外側に、幾本かの刀身が見えた。

『終わりだ』

ゆっくりと声の主を振り返る。

ニワトリに似た紫色の巨体に、白いトサカ。背中には翼が生えており、尾の方は鱗に覆われ、腹から下はまるで爬虫類のようだった。

??なんだ…これ…?

その異様で不気味な姿に後ずさりしたい衝動に駆られたが、良くも悪くも僕の体はびくりとも動かなかった。

『貫け!』

怪鳥から丈也と呼ばれた男の声が響く。

瞬間、僕たちを取り囲んでいた剣が次々と襲いかかって来るのが見えた。

こんなことなら見なきゃ良かったと思っても後の祭りです。

死ぬ時は死ぬんだから、怖いなら目を閉じたまま受け入れればよかったんだと思っても、これはもうどうにもならないことだから。

気にしてしまった僕の負け。
だけど心が叫ぶんだ。

??こんなところで、死にたくない……死にたく、ないんだ！

守護衝撃　？これがどうやら僕の力？

知らなかったんだ。

外に出るくらいなら飢えて死んだほうがいいって思ってたのに。
いざ死ぬかもしれないって状況に立たされたら、どうしたって生きていたいと思うなんて…。

僕は弱い人間だ。

そしてダメな人間でもある。

だから、異世界召喚なんて夢みたいなことに巻き込まれて、頭ではアリエナイと思っっているのに、心のどこかで嬉しいと思う自分がいたんだ。

あの世界で僕は不必要な存在だった。

でも、この世界には必要としてくれる人がいる。

誰だって「知らない」って言われるよりは「いる」って言われた方が嬉しいから。

だけどそんな気持ちの問題を語るより、この状況はもつとずっと深刻な問題だ。

『貫徹っ！』

死ぬのかな？

視界に映った鈍色の刃から目が離せず、自由にできない体の重さを遠くに感じながら、僕は漠然と思った。

異世界で死んだらどうなるの？

そんなの死んでみなけりやわからないだろうに、心のうちに急速に広がった波紋は体という枠にぶつかって次々と干渉していく。真逆の思いは打ち消され、同じ思いは増幅されて強くなる。そして最後に残ったのは、死にたくない、という気持ち。

？？嫌だ…嫌だ、嫌だ、嫌だ！こんなところで死にたくないっ！！

怪鳥が紫色の巨体を反らせ、羽開いて獣の咆哮を上げる。

『くたばれええっ！！』

絶叫に圧されるようにして刀身が閃光を発し、こちらをめがけて動き出す。

それを視界に認めた時だ。

ガラン、と脳裏で重い鐘が傾いた。

見開いたままの目がカラカラに乾き、ふちにじわりと湧き上がるものを感じる。

僕たちを守るたゆたう光の壁が、僕の心臓と連動するように脈打ち、波を立てていく。

一瞬の出来事が一枚一枚の絵になって視界いっぱいになり、その度に音が奪われていく様に狂気を掻き立てられるようだった。

ドクン、ドクン、と高鳴る胸の音が煩わしい。

ああ、これはよくある覚醒のパターンじゃないかと加速した思考

の片隅で思っけれど。

そんなことはどうでもいい。

どうでもいいんだ。

ただ、今はそれを、止めてくれ。

頼むから。

『…黙れよ』

ゴーン、という重厚な鐘の音が脳内いっぱいに響き渡った。そのあまりの衝撃に意識が飛ばされそうになる。

僕は鈍器で撲殺されるってこんな気分なんだろうなと思いながら、守護壁から爆発するように発せられた衝撃波の一陣が宙に浮かぶ刃の全てをかき消していくのを眺めていた。

波が拡散するほどに静まっていく体には新しい感覚が一つ芽生えていて、誰に教えられずともそれが自分の扱えるものの一部だと確信することができた。

??これが、僕の力…自分を守るための……あの子を守るための、力…

生きようとする力とはこんなにも強いものなのだと、泣き顔がくしゃりと歪む。

『うそだろ…っ』

ややあつて耳に届く掠れた声。

『まだだ！まだ負けてねえ！！殴り倒せ！俺の相棒！！！！』

叫びに応えるように現れたのは、表面にアルファベットが刻まれた巨大な金属バット。持ち手から身にかけて微妙に弧を描いており、あちらこちらにかすり傷や凹みが見える。

あれが相棒なのかと冷えた心で焦りながら、加減がはかれない僕は迫り来る鈍器に対抗すべく持てる力の全てを解放した。そのとき脳内に浮かぶのは、やはり重い鐘が鳴るイメージ。

ゴーンという音と共に僕の球状の守護壁から発せられた衝撃波は予想を上回る威力で広まって行き、辺り一帯を次々とのみ込んでいく。

「きゃああああっ！」

下方から少女の叫び声があがった。あれはオリヴィアと名乗った少女のものだ。

「あーあ…」

なんとも気の抜けた声が出た方を見れば、あるく在人が衝撃波にのまれて掻き消えていくところだった。え？と焦るも、彼は自分の体が消

えていくということに全く頓着したそぶりがなく、後には初めから何も存在していなかったかのような静寂が残された。

『くっそ…今回は負けたぜ…アーヴィック』

「ああ。何も問題ない」

悔しそうな声がして、丈也じゃと呼ばれた怪鳥の姿が一刻遅れて掻き消える。そうして何が起こったのか理解できていない僕だけを置き去りに、異世界はシンと静まり返る。

混乱のままメル・シャンテさんを見下ろすと、彼女さえ驚きに目を見開いてこちらを見つめていた。

そんな僕と彼女の間を引き裂くように、野太い歓声が大地に響く。心地良いとは言い難いBGMだが、それを止める術はない。

彼女は煩い男達の歓声の中に居ても凜とした佇まいを崩さずに、そつと、そこに存在していた。その瞳が何か言いたげで、僕は思わず声を返してしまう。

『僕の名前は、神嵐からしな・ゆきし名行人…』

そう呟いた途端、彼女は花が開いたような笑顔を浮かべた、から。不覚にも、それに魅了されてしまって…僕は、言葉を飲み込んだ。

ハッと気づけば、僕は部屋の中で立ち尽くしていた。
パソコンはスリープモード。

ディスプレイの電源が付いたままなのを知らせる赤いランプが目に入る。

??今、何時だ…?

不意に浮かんだ疑問を解決しようとキーボードのスペースキーを連打して、現れたダイアログボックスに半角小文字でパスワードを打ち付ける。

パツと射した明かりに反射で眉をしかめながら、見慣れた背景の隅に小さく表示されたそれを確認する。

時刻は午後3時過ぎ。

この世で一番きれいな青空を貼り付けた画面の光が、やけに眩しく感じられた。

参戦前夜　？世界は回る。僕だけを置き去りにして？

あるとき誰かが、君には尊敬できる人が居るのか、と聞いてきた。自分の親など尊敬^{それ}に値しないと言い捨てたがための問いだった。??? 愚問だ。

もし私が尊敬の念を抱くとしたら、それは世界で初めて数えることをした人物。

数学という最高の学問^{ひまじふ}のきっかけを作ってくれた人へだろう。

暗い空間に銀色の模様？？よく見ればアラビア数字の組み合わせにも見える？？が浮かんだ。

それは明滅を数回繰り返し、わずかな沈黙ののちに一際明るい光を放った。

光が止むと、誰も居なかったはずの寒々しい部屋に人の気配が生まれる。

踏み出された細い足は一切の躊躇なく室内を横切り、豪奢な取っ手に手をかけた。半分まわしたところで何かを思い出したのか、小さい口を開く。

「私。入るから」

言うだけ言つと返事を待たずにドアを引く。

「…久しぶりだな、カンナ」

銀髪の男が柔らかな視線をこちらに寄越してきたのを切っ掛けに、

男の側で中腰の姿勢をとっていた侍女服姿の女が無言で一礼し、物音ひとつ立てる事なく退出していった。

誰だろう、まあ誰でもいいか、と思ったところで男は革張りの椅子から腰を持ち上げる。

「あれは最近ジジイが雇ったオレ用の間諜だ。もつとも、兄のころからの二重間諜でもあるがな」

「ふーん」

「で、どうした？またあちらの生活に飽いたのか？」

ニヤニヤと笑みを浮かべていう男に一瞥をくれてやると、カンナと呼ばれた少女は「well, you know...」と呟き窓際のソファアーへと体を埋めた。

男はそれを目で追いながら腹の高さまで持ち上げた左の手のひらを上に向けると、平面に魔法陣を出現させた。時を待たずにティーポットとティーカップ、それから皿に盛られた焼き菓子がそれから生えてきたのを横目で見やり、二次元から三次元のを生み出すというこの世界の数学原理を疑ったところで、何もかもが馬鹿らしく思えた。ローテーブルにそれらが置かれ、自分が座るソファアーの向かいに男が腰掛けたのを見て、少女はフィとそっぽを向いた。

「今日はずいぶん機嫌が悪いな？」

「何の連絡もなしに彼らが会いに来たの。おかげで集中力がきれちやった。もう少しでひらめきそうだったのに」

「それは災難だった」

男はわずかに肩をすくめたが、別段彼女を気にかける様子もなくティーカップを口に運ぶ。

「飲まないのか？あのうすら馬鹿な王妃しか口にすることができな

「い最高級茶葉だぞ」

そして、くすねものだがな、と笑いが続く。

カンナは眉間にしわを寄せたままティーカップを手に取ると、味わうことなく一気に中身を飲み干した。

「味に寛容な国に住んできると、些細な違いなんかわからない舌になるのよ」

暗にそんなことよりも何か面白い話を聞かせると告げる彼女に、男はニヤリと笑みを返す。

「少し前にシャーレイの最後の王血が^{メル・シャンテ}“カラシナ”を呼び出すのに成功した。“カラシナ”は妨害に現れたマリゴールの“サキミヤ”をその場で下し、結果、召喚士ヴォーンズが捕虜として連れ去られた。これを機にマリゴール、グリゴール、イエットの三国が一気に緊張状態に陥り、フレリアが揺れている。このまま共倒れになるのを見ているのも面白いが…暇つぶしに少し仕掛けに行かないか？」

「具体的には？」

「シャーレイの中でヴォーンズを潰す。例の自尊心の強い統治者殿は生きたヴォーンズを交渉の切り札にするつもりだろうが、どうせどの国からでもいいように利用され何の成果も上げられないままヴォーンズを取り上げられる。今ごろ霸王に連なるものを呼び出したとてどのみちシャーレイは落ち目だ。ほどなくどれかに吸収される。だがここでヴォーンズが消えたら？」

嬉々とした顔で彼は焼き菓子に口を放り込み、再び喉を潤した。

「とりあえず、シャーレイの阿呆な統治者が切り札を失い呆然となるのは目に見えている。それから“アキルノ”を所有するグリゴ―

ル、“クレシキ”を所有するイエットに対しマリゴールは大幅な戦力低下に陥り、危ういながらも調和平衡を保っていた三国の膠着状態が崩れるだろう。そこで気を取り直した死にかけのシャーレイが“カラシナ”をぶら下げてどう出るか。さらに上辺では中立を謳っているフレリアがどう出るか。なかなか見物じゃないか？」

「それって暗殺が前提でしょ？貴方の性格上、そんな器用なことができるとは思えない。首謀者だとばれて睨まれるのがオチね」

呆れたという様子で少女は返す。

「睨まれたところで少しも怖くないがな。むしろ、自分の運がどれほどのものか試すことができると思うと期待に胸が膨らむ。堂々と暗殺しに行つて運良く誰とも遭遇せずにそれを成し得るか、それとも“運良く”予想の上を行く出来事が起きてオレを今後楽しませてくれる方に転ぶのか」

「…暇人。高見の見物中に足を引つ張られて転ぶがいいわ」

素っ気ない態度で返すカンナに、男はとても満足そうに目を細め、言った。

「退屈しているのはお互い様だろう。それにオレが転んだらお前も共に転ぶのだぞ？」

目が覚めたのは夜10時を回った頃だった。

体感時間は短かったが異世界召喚なるものを体験した僕は、いつの間にか自室に戻っているのに気づいたのとほぼ時を同じくして、

パソコンを強制終了するみたいに自分の意識を手放した。

いろいろありすぎてキャパオーバーを起こしたのだろう。ベッドの上で目覚めることができた僥倖をかみしめ、二歩の距離に心から感謝した。

のろりと体を持ち上げて室内を見渡す。部屋の隅に置かれた収納ボックスと、その上にきつちりたたまれた衣類、床には今朝発見したホコリの塊が落ちており、どれも動いた形跡がない。

??とりあえず、ご飯…

空腹を訴える腹に手を当てながら階段を下りると、大理石が敷き詰められた広い玄関が目に入る。いつもならあえて視線を向けないようにしているその場所に、今夜の僕はほんの少し興味を抱いた。あの無駄にでかい扉がこの世界と僕とを隔絶する結界の一つだとマンガのようなセリフを心でつぶやきながら、ドアノブに手をかける自分の姿を想像する。

??無いな。それだけは無い。

ゆるゆると頭を振って浮かんだヴィジョンをかき消した。

のろのろとした足取りでリビングに入り、オープンキッチンを照らす明かりを付けて冷蔵庫の扉を開ける。ラップの掛かったどんぶりとお鉢を取り出して、そのままレンジの中へ。600ワットで3分もあればそれなりに温まるだろう。

その間にキッチンボードから取り出したコップに牛乳を注いで、ダイニングテーブルの上に置く。そこには先客がいて、手に取って目を通すとそれはそれは美しい字で「明日はお休みを頂きます。

美代子」と書いてある。じゃあ明日は一日中気を楽にして過ごせるなと安堵したところで「チン」という馴染みの音が鳴り、四角い箱の扉を開けて温まった食事を取り出すとテーブルまで運んでいった。

薄暗い部屋で、もくもくと食べ続ける。最後に牛乳に口をつける
と、一気にそれを飲み干した。

いつもと食べる時間が違うせいかな、しばらく腹に何も入れていなかったせいなのか、どことなく物足りない。空いたどんぶりとお鉢、コップを流しに置いて水を張り、菓子置き場からせんべいを3袋と冷蔵庫から1リットルのお茶を取り出して自室へと戻る。

その頃にはアレは夢だったんじゃないだろうかと思えて来て、もやもやする頭を切り替えるために久しぶりにシャワーを浴びようとせんべいとお茶のパックをパソコンが乗った机の上に置き、衣類を抱いて浴室へ向かった。

母親には昔からカラスの行水と顔をしかめられていたが、本人からすれば効率の良い入り方をしているにすぎない。自分ルールで手際よく身を清めた僕は洗濯された衣類を身にまといさっさと浴室を出る。熱気の立ちこめたあの空気が苦手なのだ。

それなりにスッキリとした気分ですべて部屋へ戻り定位置に着席するとますますあの体験は夢だったんじゃないだろうかと思えてくる。現実との境界が極めてあやふやな白い真昼の夢。それが身に起きた真実だったのならば立ったまま寝てたつていうオチで片付くのだと気づいた僕は、記憶を無理矢理追いつくように情報の海へとダイブした。

せんべいをかじり、お茶をちまちま飲みながら、いつも通り、ネット小説や動画を見て。

ニュースに目を通し、気になったことや知らないことを検索していく。

そうしていつの間にか夜は更けて行き、辺りが薄明るくなった頃。ヘッドホン越しの耳に届いた重低音を合図に固まった背中を伸ばし、最後にソフトウェアのアップデート確認ボタンをクリックする。ほどなくしてアップデート項目があることを知らせるウィンドウが開いて、ダウンロードを実行するための管理者確認用のパスワード

ボックスが現れる。慣れた指運びでそれを打ち付け、薬指をエンターキーに伸ばした時だった。

??ああ……………デジャヴが…

ぼんやりと思うと同時に、僕は再びあの世界へ足を踏み入れている??。?

動き出した齒車　？全てを廻す始めの一つ？

その時、貴方が私の運命のような気がしたのは何故だったのか。
胸に鈍色にひいろを突き立てられ、次には貫かれる夢を見た。
跳ねたのは体だったのか、それとも心だったのか？？？。

「貴女ってバカなの！？」

不意に利発そうな声が寝台の上から飛んで来て、私は読み進めていた本から顔を上げた。母の形見の懐中時計に目をやれば、既に時は日の出の頃になっている。情けない話だが、召喚が成功したことによる興奮でなかなか寝付けなかったのだ。

「お早うございます」

無意識のうちにほころんでしまったらしい口元に少女はきつく眉を寄せ、嫌悪感を露にしたが、それが幾分かの照れを含む感情であることを知ってしまった私の頬はますます緩む。

「何がお早うよ！まさか本当に隣で寝たわけ！？」

薄暗い廊下に怒声が響くが、ずいぶん前から自分たちの他に人の気配はない。

ここは忌むべき場所で、好き好んで近づくものなど居ないのだ。まるで嫌なものを遠くへ押しやるかのように、連れてこられたのは最奥にほど近い二人用の牢だった。

「お腹は空いていませんか？魔法が使えないので温めて差し上げることができないのですが…」

少女は眉間にしわを寄せたまま、私が床から持ち上げた食事を無言で睨んでいる。

さり気なく見ていたので、彼女が連れてこられてから水の一滴も口にせず床に付いたのは知っていた。喉も乾いているだろうし空腹でもあるはずなのだが、どうしたのだろう？と考えて、ハッとそれに気づく。

すぐに私は膝の上に盆をのせ、食器を取って皿の上の食物を少しずつ口に運んで行った。最後に水に口をつけ、ハンカチの裾で食器を拭いて顔を上げる。

「大丈夫です。毒は入っていませんよ」

「…そんなのわからないわよ。貴女に耐性があるのかもしれないし？」

「安心してください。そういう教育は受けておりませんから。それにハバロイ様はまだヴォーンズさんを生かしておきたいとお思いでしょうし…」

そつと立ち上がり、ベッドの上に腰をおろしたままの彼女に食事を差し出す。

少女はためらいながらもそれを受け取ると自分の膝の上に置いてしばらく睨んでいたが、意を決してスープをすくいとり恐る恐る口に運んでいった。

「貴女ってバカなんだわ」

呟かれた言葉に私は戸惑う。

その戸惑いを悟ったのか、彼女は他の食べ物を次々と口に運びながら言葉をこぼしていく。

「まず、どうして捕虜と一緒に牢屋に入っているのよ？ 貴女、まがりなりにも王族なんでしょ？ それにその器、今わたしが食べてるのと同じじゃない。王族なのに捕虜と同じ食事内容ってどうかしてるわ。おまけにもう一個あるそっちの寝台もわたしが寝てたのと同じみたいだし、薄っぺらい寝具も一緒。しかも指導者を様付けって、貴女の地位の方が上なんじゃないの？ まあその辺は余所の国のことだからどうでもいいけど。……わたしの処遇が決まるまでこのまま生活を共にするつもり？ それって同じ召喚士としての同情？ それとも馬鹿にしているの？」

「ええと……」

言われて、今度はこちらの口が閉じてしまう。

どう説明したらいいのかと開いては閉じる口元の動きに睨みを利かせていて、少女の顔は険しい。

それを何度か繰り返しているうちに、情けない自分の立場や王族の血を引く故の恥など、蓋をしていた複雑な感情がどつと溢れてきて、泣き顔を必死に笑みで隠したような歪な表情になってしまう。

なんとか声にしようと出した音はところどころ掠れていて、さらに不甲斐ない思いを抱いてしまう。

「これは同情でも、まして貴女を馬鹿にしているわけでもなくて……」

そう。たぶん、簡単に言えば。それは。

「私の我が儘、なんです。ええ。この理由が一番しつくりきます」

そつと目を伏せて、言葉が続ける。

「この国における王族の血は、既に誇れるものではありません。先の革命でメル・シャンテとそれに連なる血筋は全て処刑されましたから。その罰をすり抜けて生を受けた私は、いわば償いを終えていない罪人と同じ存在なんです。生かされたのは…」

「カラシナを呼び出せる可能性があったから？」

「はい。失敗していたら命はなかったでしょう。…シャーレイにおける王血とは国奴であり、階級としては最下層に当たります。カラシナ様を呼び出す事ができた私に用意されたのは確かにここより良い部屋でしたが…」

言い詰まる言葉の先を取って少女はこともなげに返す。

「針の筵なわけ」

「…そういうことです」

苦笑とともに漏れたそれに、罪悪感がくすぶる。

「ですから、私がここに居るのは我が忤なんです。本当ならば甘んじて罰を受け入れるべきなのですが…さすがに、そこまで強くはありません。ですが、ヴォーンズさんの気分を害しているのでしたら…」

「そういう理由なら構わないわよ。ここに居なさいよ。同情でも馬鹿にしてるんでもないならいいから」

ぶっきらぼうな物言いだ、その言葉の優しさに沈んだ心が浮上していく。こんな風に他者に情を向けてもらえたのは久しぶりで、知らぬ間に守られていた過去を思い出しながら、存外、人は優しい生き物なのかもしれないと胸の奥がふるえた。

「ありがとうございます。優しいんですね」

「ばっ…違いわよ！暇だから話し相手がいて助かったとかちよつと思っただけよ！ちよつとだからね！？あと、その、ええと、そう！話してるうちに貴女がうつかり内部情報を漏らすかもしれないし！いい手みやげになるわっ！」

「はい」

「あ、う……………ず、ずるいわよ、その顔…」

??…?

頬を真っ赤に染めてそっぽを向く少女の姿に、すさんだ心が癒されていくような気がしてホッと肩の力を抜いたとき、角の向こうでコツリと石畳を踏む音が鳴った。すぐに来訪者の存在を知らせようと視線を大げさに彷徨わせてみたが、未だ自分の世界に入ったままの彼女には残念ながら届かない。

どうしようかと迷っているうちに、コツ、コツ、とゆったりとした歩調で近づいてくるそれに、どことなく違和感を覚える。私はいつも静かな場所にいたので、どちらかというと人の足音に敏感だった。

これは見張りの兵士のたてる音ではない。

まして王族を忌む彼の指導者のものではもちろんあり得ない。このゆったりとした歩みは余裕の現れであるから高官の誰かかもしれないが、共をつけないその人物を私は知らない。そもそも彼らがこの場所に用があると言って下りてくるとは思えないのではないだろうか。

??では、誰が？

素朴な疑問だった。

それは純粹な好奇心に似ていた。

恐れがないとは言わない。だから、足音が近づく度に心の針が不安と期待を行き来して、心拍数が上昇していく。

ゆっくりと腰を持ち上げたあたりで彼女はようやく来訪者に気づいたようだが、こちらの視線はすでに鉄格子の向こうに広がる薄闇の方に向いていた。

そのまま静かに闇に対峙する。足音は格子のすぐそばまで近づいて、ぴたりと止んだ。

「幸運だな」

男の声だった。

そつと顔を上げれば艶のある銀色が目に入る。暗がりには居るせいかもしれない。銀の色が辺りにおぼろな光を放ち、闇色から男をはつきりと浮き立たせていた。

思ったよりも若い。といっても自分よりは年高く見える。それに身なりが良い。

ただ、その姿は一見すると異国の騎士のようにも思えるが、正当派というよりも異端という雰囲気漂っており、従順さが微塵も感じられないのだ。よって使われる側ではなく使う側の人物であることが予想されたが、腰にさしてある装飾過多とも思える剣はあまりにも男の色に馴染みすぎている。おそらくそれはただの飾りではなく実用に富んだ代物なのだろう。故に迷う。

この国は過去、革命により権力が王族から指導者に移されたが、民が疎んだ階級社会は今も続いており、政策が進められているにも関わらず年を重ねるごとに貧しさを増している。今や同盟国も無くさらには国を接するマリゴールとイエットの境界で諍いが頻繁になつており、各国とも大々的な開戦の切っ掛けを待つばかりだという。加えてマリゴール、イエットはそれぞれが接するグリゴールとも火種をくすぶらせているというのだからややこしい。今のところ傍観している大国ウイスコンシア、中立を唱えているフレリアとて、い

ざいずこかで火蓋が切って落とされれば何らかの動きを見せるのは必至であり、場合によっては大陸戦争に発展する可能性さえあるのだ。だから、このところ外交を目的に訪れる他国の使いはぴたりと止んでいた。それほど状況は逼迫しており、どこにも余裕は無いはずだ。

ここへきて明らかに異国の者と分かる人物が城の地下に現れる理由がわからない。まして剣に優れた指導者といえれば一番に軍職があげられる訳だが、目の前に立つ男がそれだと思えないのだから、ますます不思議な話である。まさか一夜のうちに国が落ちたとも思えない。起きていたから覚えているが、昨晚はとても静かな夜だったではないか。

では一体彼は何者で、このような場所にどんな用事があるのだろうか。

ただただポカンと見上げているうちに、薄い唇が愉快そうに開いた。

「堂々として来たにも関わらず運良く誰にも会わずにここまで辿り着いたというのに、牢の中にはヴォーンズの他にもう一人。予想外な事が起きたぞ」

誰に話しかけているのやら、男は楽しそうな口ぶりで視線を背後に向ける。つられて肩越しの闇に目をこらすが、そこに人の気配はない。

「さて娘。お前は誰だ？」

顔を戻し笑いかけてくる口元とは裏腹に、細められた目元はどこまでも冷たい光を帯びていて思わず体がこわばった。その細くもなく太くもない中庸な体からは威厳に満ちた気迫が溢れており、目上の人物なのだろうかと内心首をひねりながらも最上級の礼で腰を折

る。

「初めてお目にかかります。わたくしはルル・メル・シャンテと申します」

皮肉なことに私はこういう挨拶に慣れていた。何の抵抗もなく流れるような動作で返す。

深く下げた頭をゆっくりと元に戻し、正式の場ではないのでこのくらいの態度で問題ないだろうと視線を戻せば、男は驚きの表情を浮かべた後にますます瞳を凍らせて、侮蔑のそれに変えていく。

「シャーレイの王血か」

真つすぐに放たれた冷たい音が心に鋭く突き刺さる。

「久しく手入れをされていない髪に町民がまとうものよりみずばらしい服を着て、顔には化粧のあとさえ無いときた。おまけに居室が地下牢とは、王族が聞いて呆れる。ここはこの程度の国なのか」

まさか見た目を罵られるとは思わなかったが、言われてみればなるほど、自分の姿は高い地位にいるらしい彼にとつて見るに耐えない酷さなのだろう。それでも数日前に着ていたものより上質の生地を使った仕立物なのだが、男の着ているものと比べてしまえば格段に劣るのは確かだ。髪の手入れと化粧については…やり方もわからないし、それが出来るような身分でもないので仕方ない。地下牢に居るのは自分の身勝手故だが、その説明を求められているわけではないので言わずにおく。

ただ、誰が見ても美丈夫と答えるだろう異性から言われるのはなかなか辛いもので、もう子供ではないのだからせめて泣くまいと口を結んだ。

「ちょっと！いきなり失礼じゃない！？何の用か知らないけど貴方の方こそさっさと名乗りなさいよ！！」

「っ、ヴォーンズさん、いいんです。この方のおっしゃる通りですので」

食器を置いた少女がかみつくような剣幕で出て来たのを男が機嫌の悪そうな顔で睨んだため、私は慌てて間に入る。この人物はどうも気が長い方ではなさそうだ。些細なことで気分を害し腰にある剣を抜かれでもしたらたまったものではない。

なんとか矛先をもう一度こちらに向けねばと、無い頭を必死に動かし言葉を探す。

「ですが、故国の名誉のために言わせて下さい。この程度であるのは国ではなく、わたくしの方なのです」

？？？どうだろう。これでいけるだろうか。

国の立場を守りつつヴォーンズさんから興味をそらすことを目的としたセリフが口からこぼれ、気まずい空気が流れる場をなんとか繋いだと思えば、こちらの予想を遥かに上回る勢いで男の機嫌が降下していくのを肌を感じた。もしかして言葉を間違ったのだろうかと不安が脳裏をかすめたが、こちらを射殺さんばかりに睨んでくる眼差しに少なくとも目的の半分は達成できたのではないかと自分を納得させる。あとは気力の勝負に思えた。

そのまま無言で視線を交わらせていると、男が放つ威圧感が徐々に増していく。

走ってもいないのに動悸を覚え、冷たい汗が背中のにじみ始める。

？？？ああ。次に動いたら、この人は間違いなく剣を抜くわ……………で

も、私はこんなところで。

そうだ。己に課せられた使命のために、こんなところでは死ねないのだと、今にも折れそうな心を支えるようにゆっくりと両手を結ぶ。

??カラシナ様…どうか力をお貸し下さい。

この得体の知れない男から目を逸らしてはならないような気がした。いま動きを見失ってしまったらきっと自分の命はないと、何故か確信できる。

灰色の瞳と視線を交わらせること数分。薄闇に浮かぶ男はついにその身に怒気を留められなくなったのか、長い息と共に破壊の意思を吐き出した。

「????不愉快だ。消え失せろ」

腰の剣に手が伸びることはなかったが、言葉に乗せて放たれた殺気に体のほうが反射する。

??カラシナ様!!!

きつく結んだ目の先で力と力がぶつかる気配がし、一拍置いて辺りが爆発音に包まれる。

キーンという耳障りな音によって聞こえるはずの音を全て奪われ、クラクラする頭に手をそえてそろりとまぶたを開いてみれば、白い煙が視界いっぱいに広がった。

爆発の衝撃で明かりをもたらず鉾石が砕けたらしく、牢内はより闇に満たされる。

これ幸いとすぐ側の少女へと手を伸ばし、ひしゃげた鉄格子の隙

間へと自分の体を押し込めば、案の定、簡単にすり抜けることができた。続く少女を引きずるように穴に通し脱出を試みる。ちらりと後ろを振り返るとこちらの意を汲んだのか、力強い瞳で彼女が頷く。それに頷き返し、手に手を取って地上を目指す。私たちはどちらからともなく駆け出した。

あの男が何者なのか不明だが、借り受けたこちらの力と彼の力がぶつかり反発した瞬間に、場から気配を消したように感じたのだ。高名な魔術師のうちには空間の移動を可能にする者もいると言われている。どこへ消えたのか知れないが、地下牢のような狭く視界の悪い場所で相手にするのは非常に不利なように思えた。

契約した召喚獣を呼び出すのも、その力を借り受けるのも消費する魔力の量は同じだ。ただし借り受けた力を使えるのは一度きりのため、同じ消費量でも呼び出す方が格段に効率が良い。だから、再会するならできれば地上の広い場所が好ましい。なにせ召喚獣は一般的に体が大きく、なかでも自分が契約したカラシナという種は巨大な部類に入るのだ。

「ねえっ、このまま行つて番兵につ、見逃してもらえと思うっ？」

思考にふけつてしていると横から弾む声がして、いつの間にか耳鳴りが止んでいるのに気づく。

言われた言葉を反芻し、非常事態とはいえ牢から出て来た囚人の姿を目にした彼らがどんな行動にでるのかを考えて、確かにそうだと思つたが、何か重要なことを忘れているような気がして思考がさらに加速する。

??そういえば…

「あれだけの音が鳴つて、駆けつける人が無いっ、のは、おかしいですっ。もしかしたら居ないっ、のかもしれないっ」

私の言葉に思うところがあつたのか、少女は反論しなかった。

彼女の両手首には召喚や魔法の発動を阻害する腕輪がはめられている。それらを繋ぐ鎖が体の動きに合わせ、静かな空間に一定のリズムで金属音を響かせる。

暗い廊下を右に曲がり、最後の角が見える通路に差し掛かったところでもう一度振り返ると、視線を交わらせた瞳が前を向けと告げて来た。

「ヴォーンズ様、ご無事でしたか！」

声のした方を振り返れば、通路の奥から細身の男がこちらに向かってくるのが見えた。その手の中には何かが握りしめられている。男はあつという間に私たちの側まで辿り着くと、かたく握りしめていた鍵を素早く彼女の手枷の鍵穴に差し込んだ。

「カインと申します。使いでやって参りました」

そう言う彼はどこにでも居そうな凡庸な顔立ちで、言葉を発しなければ景色に溶けてしまいそうな雰囲気醸し出していた。すぐに重い音を立てて腕輪が床に落ちる。

「移動符持ってる？」

「はい。こちらに」

「今すぐ外へ連れてって」

「ですが」

「そんな場合じゃないのよ！何かよくわかんないけどやばい敵が居るの。サキミヤを召喚するから外へ連れてって！あ、この人も一緒にね！」

少女の言葉を受けて、カインは懷から取り出した紙を手早く広げ足下に置くと、描かれていた魔法陣を踏みつけた。

「お早く」

そんな二人のやり取りに呆けていると不意に腕を掴まれる。

かすみ始めた視界の隅で彼らが急ぎ手を繋ぐのを見て、空間を移動する陣が描かれたそれはこういう風に使うのかとぼんやり思う。世の中にはそういうものがあるという知識はあったが、実際に目にするのは初めてだ。

ほどなくして冷たい風が頬をなでるのを感じ、無事に屋外へ移動することができたのかと安堵する。やや離れた場所に茶色の屋根の家々が連なっており、それを見下ろす立ち位置に居る事から、どうやらここは城下町を見渡せる城壁の通路の一角らしいと推し測る。

ふと背後を振り返ったところで、西に位置する棟の一つが巨大な力でえぐられるのが見えた。

「何!？」

途端に響いた爆音にカインと少女が同時に振り返る。

「あいつだわ!!」

明けの空に浮く小さな人影を見つけた異国の召喚士は、忌々しげに呟いて空中に“サキミヤ”の召喚陣を描き始める。

「あの、手伝って下さるんですか？」

思わず口をついて出た言葉に彼女は始め怪訝な表情を浮かべ、ハッとそれに気づくと今度は盛大に眉を寄せた。どこかバツが悪そう

にしながらも声を荒らげ照れ隠しをする様は、こんな時でも可愛い。
しい。

「アレはいずれわたしの国の脅威にもなりえると感じたから、ここで潰しておこうと思ったただけ！召喚獣が二体もいたらすぐにケリがつくでしょ！？だから貴女もさっさとカラシナを召喚しなさいよ！」

言われて今度はこちらが焦る。

同時に、再び城の一部が破壊される音が響いて「敵国に手を貸すようなことをして大丈夫か」と問いかけようとした口を閉じる。

「？？ヴォーンズさんの言う通り、今は話してる場合じゃない。私も早く召喚しないと…」

すうと息を吸い集中力を高める。

その横で彼女が彼らの名を呼ぶ気配がした。

「？？神よ。喚呼かんこの法に従い、界を超え、我と契約を結ぶ者の召喚を、ここに願います。」

それは自分を落ち着かせるための言葉であり、召喚を成功させるためのまじないでもある。魔法を行使するためには必ず踏まなければならない手順や文法があるというが、こと召喚に関しては定まった条文があるわけではないのだ。

ちらりと少女の召喚陣に視線を向ければ、ちょうど青い毛に覆われたオオカミがそれを抜けて現れるところだった。

『在あ人は寝あてるから来ないよ』

美しい姿勢で器用に城壁に着地すると、巨大なオオカミは前足を掻いて呟いた。

その声を聞いて、果たしてカラシナ様は呼びかけに応えてくれるだろうかという不安にコクリと喉が鳴り、祈るような気持ちで目を閉じる。

??どうか。どうか…応えて下さい。

ストーンと自分の中の魔力が消えたのを感じると同時に、世界と世界を繋ぐ扉が空中に描かれる気配がした。

??お願いします。この国を、お守り下さい。

契約した召喚獣を呼び出すのに必要なのは、己の魔力と彼の名前^か。
願いを込めて。
想いを込めて。
紡ぐ音を世界に満たす。

「ユキト様…」

召喚陣が明滅し、銅色^{あかがねいろ}の美しい影が浮かび上がる。
そんな光景を、私は朝日の差し込む中に見た気がした。

巻き込まないでよ…　？僕は玄関の扉にさえ近づけない？

ついに精神に異常をきたし始めたのかと自嘲するまで、あと数日のこと。

？？おかしい。アレは夢だったんじゃないのか？

この世界の色は鮮烈すぎて、徹夜明けの目には少し辛いものがある。

あちらの世界では感じる事のない妙な臨場感に、思わず喉の奥が鳴った。

眼下には、西欧圏に見られるような砦と城を融合させた灰色の建物が見える。質感から石壁と思われるが、ある一画は他の場所よりも色の濃い石が使われており、つぎはぎとまではいかないがそれに近い印象を受けた。また、ある一画は崩壊しており、不思議に思っ
て目を凝らすと屋内から出てきた人々がそれを見てパニックに陥っている様子が伺えた。

「カラシナ様」

あの声がして、そちらの方に視線を向ける。彼女は昨日と同じような様相で城壁からこちらを見上げていた。その側には焦げ茶色の髪を結い上げた少女と、初めて見る男の姿があった。

『何？またカラシナさんと戦うの？』

一度耳にしたことがある音が入ってきて、発生源を探そうと首をひねれば、美しい姿勢で前足を揃えたオオカミが少し離れた場所に立っている。その瞳にこちらの姿を映し、どこか呆れたように首をかしげたと思ったところで、彼の名前を思い出した僕の目に獣の姿がぼんやりと人に変容していくのが見えた。

彼の名前は崎宮^{さきみや・ゆづと}有人。

あちらの世界の高校生で、攻撃に容赦という言葉を持たない青年だ。昨日は灰色のズボンの上に白のワイシャツ、首元には黒地に銀のストライプが入ったネクタイという制服姿だったが、今日は黒のジャージに白いTシャツとずいぶんラフな格好だ。双子の兄弟である在^{あへ}人と全く同じ顔をしているのだが、雰囲気がまるで違うため簡単に見分けることができる。やる気に満ちあふれている方が在人で、どこか気怠げにしている方が有人。獣の姿ならばよりわかりやすく、赤い毛並みを持つ方が在人で、青い毛並みを持つ方が有人という具合だ。

そんな彼はどうにも面倒だという様子で頭の後ろを掻きながらも、やはり冷たさを含む視線をこちらに向けていた。

「今日は違う。あつちに人が浮かんでの、見える？」

確か名をオリヴィアと言った少女が、有人に視線を向けながら城が崩壊している方向を指差した。

「あれが敵。何か得体が知れない男なのよ。うちの脅威になる前に消したい」

つられて視線を向け目を凝らすと、確かに空中に人が浮いている。わずかに虚を突かれたが、そういえばここは魔法のようなものが存在する異世界だったのだということを思い出す。そしてどうやら戦争中であるらしいことも。

「…あの人が敵なのは分かったけど。ここにカラシナさんが居るのは何で？」

「今だけ協力するってこと！」

「ふうん」

微妙な返答を返した有人に対し、僕の召喚主であるメル・シャンテさんが一歩踏み出し頭を下げた。

「申し訳ございません。今一時^{いっぴぎ}だけ、サキミヤ様のお力をお貸し頂きたいのです」

「…そんなに謙^{へりくだ}られても…っていうか、別に構わないよそんなこと。結局こっちは部外者なんだし」

「じゃあ、そういう訳だから！ユウト、よろしく！」

そう言われた少年はふとこちらから視線をはずし、少しだけ間をおいてから再びこちらを見上げて言った。

「カラシナさん、どんな攻撃ができるの？」

???うえっ!??

急に話しかけられてビックリしていると、それが心の叫びに聞こえたのか、有人は嘆息し遠くに浮かぶ男の方へと視線を向けた。

「召喚されたばっかだし、分かる訳ないか。とりあえずさ、昨日のヤツはできるよね？」

そう問われて即座に首を縦に振る。

こちらの世界で手に入れた魔法を扱うという感覚は、あちらの世

界に戻ったところ何事もなかったかのように失われたが、再び召喚されこの世界に足を踏み入れたと同時に復活したのだ。イメージすればそれが魔法となつて顕現するらしいことはわかるのだが、いきなり攻撃のイメージを聞かれても答えられる訳がない。ファンタジーなロールプレイングゲームで遊んだ経験がない訳でもないのに、魔法で攻撃という雰囲気はわからなくもないのだが…実際、「やれ」と言われても気持ちが付いていかないのだ。

たぶん、彼はそんな僕の気持ちを汲んでくれたのだろう。もしかすると彼自身、召喚されたばかりの頃に同じような思いを抱いたのかもしれない。

「俺が向こうに行くから、こっち側守つてくれる？複数人で同じ敵を攻撃つて、よっぽど相性がいいか経験を積まないと難しいと思うんだよね。味方ならノーダメージ、って訳にはいかないから。」

「わ、かった…」

掠れる声をなんとか絞り出した承の意思を告げると、彼は足を下ろしていた城壁を思いきり蹴り込み、空に浮かぶ男の方へと跳んで行った。次に着地した距離から考えると、とんでもないスタートダッシュだったのだが…不思議なことに足場にされた石造りの城壁にはヒビ一つ入っていないかった。

「カラシナ様…あの、召喚に応えて下さりありがとうございます」

異世界すごい…などと働きの悪くなつてきている頭で思っているのと、メル・シャンテさんの声が耳に届いた。再びきれいなお辞儀をされて、なんとなく居心地が悪い。だって僕は彼女に頭を下げられるような立派な人間ではないのだから。できればやめて欲しいと思いつつながらも口に出してそれを伝えられないのだから、我ながら相当

なへタレだと思う。そんな微妙な気分のまま、いつも通り自分の殻に閉じこもってしまいそうになった所で、何かの破壊音が届く。

「……………うそ」

ポツリと呟かれた小さい声に触発されて、戦い始めたらしい彼女の方に視線を向ける。

そこには、朝日を受けて輝く鋭利な結晶が、浮遊する男をめがけて次々と打ち込まれていく光景が広がっていたのだが…。

「召喚獣の攻撃をいなしてる…人間が…？」

「これは…どういう、ことでしょうか」

少女に続き、その隣に佇んでいた知らない男が声を漏らした。

その間にも躲された氷塊が一つ、また一つと地面なり城壁なりにぶつかって、触れた場所を深くえぐっていく。

壊れた棟を見てパニックを起こしていた人々は、氷塊が降ってくるのを目にした途端さらに混乱し、安全な場所を探し求め方々に散っていく。そのうちの幾人かはこちらの方を指差して何かを叫んでいるようだったが、なんとなく不安にかられ、僕はあえて耳を澄ます事をしなかった。

「何者なの？あいつ…」

苦々しく吐き捨てるオリヴィアと、一定の距離を保ちながら男の死角になっていそうな際どい位置をめがけ、まるで踊っているかのような軽やかな足運びで投擲を繰り返す少年を交互に見つめる。

??すごいな、有人君…

空を切る腕の先から結晶となつて現れる水の塊。この世界の魔法が施行者の思い描いたイメージの通りに発現されるというのなら、一つだけではないそれらに複雑な軌跡を持たせ自在に飛ばすことができる彼の想像力はどれほどのものなのだろうかと思つたところで、薄ら寒い風が背中を撫でて嫌な汗が噴き出した。

とてもじゃないが、勝てる気がしない。昨日はバリアみたいなのが張れたから何とか凌ぐ事ができたのだ。バリアを張る魔力が無くなつてしまつたら避けることなどできそうもない。それが僕の率直な見解だつた。

ならば、そんなにすごい攻撃をいなししているらしいあの男は一体何だというのだろう。こちらの世界の男達は普通にスペックが高いのか？浮かんだ疑問の答えを探し地上を走り回る他の男の姿を目で追うも、やはりパニックに陥り情けない格好で逃げ惑う様子しか伺えない。

そこでようやく焦げ茶色の髪を持つ少女と見知らぬ男の会話が脳裏で復唱され、その話から推測するに、彼はいわゆる規格外の人間なのだなと思ひ至る。

規格外。

異世界にもそんな人間が居るんだな、それとも異世界だからそんなのか？と冷静に思つたところで、男の灰色の瞳がこちらの姿を捉えた気配を感じ、そのあまりの眼光の鋭さに僕の体は一瞬で芯まで凍りついた。

そのとき、有人が男の意識が自分からほんの少し逸れたのを逃す事なく、大掛かりな攻撃を仕掛けに出る。

オオン！という獣の雄叫びが響き渡り、男の周りをいくつかの水の線が踊つた。

鋭い視線が自身を取り囲むそちらの方へと向けられたのを知ると、無意識のまま開いた口から短い息が吐き出される。その音を聞き、緊張していた体が弛緩していくのを感じながら、刻み込まれた戦慄に吞まれるまいと必死に心を固くする。

??…なんて視線だ……殺されるかと思った…。あれは何のためらいもなく……

人を殺せる人間の目だ、と思ったところで、戦争をしている世界なら十二分にあり得ることだと、妙な軽さで得心する自分が居る。重い衝撃を少しでも軽いものにしようとする“心の安全機能”みたいなものかと思いつながら、それでも暗い気分のまま呆然としていて、軽やかに城壁を蹴ってこちらに戻ってくる有人の姿が目に入る。

??え?あの人は?

恐る恐る視線を向けると、そこには刺々しい巨大な氷のオブジェクトが浮かんでいた。

先ほどまでは幾本かの水の帯が男を中心にして惑星の軌道を示すように囲んでいただけだったのだが、その帯から無数の棘が突き出して対象を貫いているように見える。

「オリヴィア、悪いけど俺一人じゃ勝てないみたいだ」

「え……」

「それと、アレで魔力を使い果たしたからもうこっちは居られない。帰ったら在人を叩き起こすから、必要なら呼んで」

「う、うん」

有人はちらりと後方を振り返り。

「余計な事かもしれないけど…逃げた方がいいんじゃないかな。あの人の強さは人外じみてる」

そこで遠くに浮かぶ氷のオブジェクトに亀裂が走ったのを目に留

めた彼は、「やっぱそうだよ」と誰に語るともなく小さく声を漏らした。

白く輝く巨大な結晶のどこにも赤い色が散っていなかったから、僕の方もあの人が無傷であるのは予想できたことなのけど……。それでも現実にはそうだと言われると、驚かずにはいられない。そのくらい有人の仕掛けた攻撃は絶望的な様相を呈していて……。見た目だけで、相当な拘束力と破壊力を想像させるものだったのだから。

「カラシナさん。一応、言っとくよ」

不意に掛かった声に、彼の方を向く。

「Good luck. こういう時に使っんで合ってるよね。じゃあ」

そう言ってわずかに口元を緩めた有人の力強い表情に、僕は絶句する。同時に、ああ、若いつてことはもうそれだけで強みなんだよなど、過ぎ去った時に黄昏れながら。じゃあ、の続きに、また、がないのはそういう意思表示だと理解して。言葉少なな彼にそこまで言わしめるほどの関係をこの短い時のうちに築けていたとは思えないが、8年ぶりに向けられた他者からの好意の一端に、何故か心の奥が震えるのだ。

何も答える事ができずにいると、少年はさして気にする様子も見せずに踵を返す。その視線の先に魔法陣とおぼしき巨大な円形の模様が浮かび上がるのと時を同じくして、水の結晶に刻まれた亀裂が急に深くなり、あっという間に砕け散る音が響いた。

粉碎された氷の欠片に日の光が映り込み、朝焼けの空が幻想的な輝きに満たされる。

その最中に堂々と佇む男は、青い毛並みの召喚獣が異界の門をくぐり消えていくのを涼しい顔で見送ると、こちらの方に視線を寄越

し、両の腕を静かに組んだ。

「メル・シャンテが喚び出したカラシナか」

銀の髪を風に散らしながら、男は口の端を上げる。

「カンナ、出番だぞ」

巻き込まないでよ…？僕は玄関の扉にさえ近づけない？（後書き）

ようやく…ようやく投稿できました…！

大変遅くなりまして本当に申し訳ないです。

次話でやっと主人公とヒロインが出会えそうです。

この小説の投稿を始めたとき、異世界タグが入っていると言っても内容がシリアスなので、読んでくださる人は少ないだろうなあ…お気に入りに入れてくださる人なんか居るのかな…と思っていました。

10話くらいたまったら一人くらいエンディングを気にしてくれる人が現れるかもしれないし！という淡い期待を抱きながらの発進でしたが、思いがけず、現時点でお気に入りに入れてくださった方が二桁も…（；；）
感涙です。

今回もここまで読んでいただき、どうもありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5565u/>

喚呼の法

2012年1月8日18時50分発行